



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(13)

第VI章 考察とこれからの取組み

中村周平

ける取組みについていくつかの考えを述べて

前回、時系列に書きだした過去の事実を踏まえ、修士論文における考察を記述しました。今回は、その考察から、自身が、今後取り組んでいきたい事柄について、記述していきたいと思います。

2 これからの取組み

前回の考察も踏まえ、今後のスポーツ事故にお

いきたいと思います。

これまでの出来事を時系列に記述していく中で、私や両親の様子、当時の心境については、事細かに書き出すことができました。しかし、修士論文を書き進めている中で、足りない「何か」を常に感じていました。それは、ラグビー部の指導

陣や学校の存在でした。本来なら、「当事者」として私の事故に向きあってほしかった人たちの、事故当初からの様子や心境を書き出すことができませんでした。事故を二度と繰り返さないことを考えていく上で、事故に遭った本人や家族から「だけ」の情報発信では不十分ではないか。事故に遭った本人や家族とラグビー部の指導陣や学校、相互の事故後の経験を共有し、共に情報発信していくことが、スポーツにおける事故を少しでも減らしていくことにつながるのではないかと考えるようになりました。

そのためには、一つとして、スポーツ事故における処理を「司法の場」でやりとりされてしまうことを未然に防ぐ仕組みを考えていく必要性があると考えます。考察の部分でも触れましたが、「司法の場」のもつ特性は、決してスポーツ事故における処理としては適切なものではないと感じています(もちろん、事故に関する過失の有無に応じて責任を負担するという意味で公平性が担保される、社会システムの一つであると考えます)。スポーツ事故において、本来なら存在しなかった「加害・被害」の関係を浮き彫りにしてしまうからである。しかし、事故に遭った本人や家族だけが、事故によって変わってしまった現実を受け容れ、何の補償もなく、これからの生活を考えることも非常に難しいことです。学校側との関係を維持しながら、同時に事故に遭った本人や家族を救済することが、スポーツ事故における処理を「司法の場」でやりとりされることを防ぐ手立てとなるのではないのでしょうか。その一つとして「無過失補償」の可能性を考えていきたいと思えます。「学校」におけるスポーツ事故の多くが、その後の補償をめぐって「司法の場」で「過失」の有無を争う。そういったケースは、私だけでなくこれまで裁判事例でも多く見られます。しかし、「司法の場」に出てしまった時点で、それは「スポーツ事故」ではなく、事故の責任の所在を明らかにする場になってしまうのです。そうなれば、

その後の補償の有無に関わらず、相互の人間関係は崩壊し、事故の教訓は活かされないままになってしまいます。「過失」の有無に関わらず事故に遭った人たちを補償する「無過失補償」の構築は、その事故に関わる人たち、広くはスポーツに関わる多くの人たちの助けとなってくれるのではないのでしょうか。

また、私の場合、「司法の場」に打って出たことによって、ラグビー部の指導陣や学校との間に大きな「溝」が生じてしまいました。本来なら、事故の「当事者」であった人たちを蚊帳の外に追いやってしまったのです。今考えると、当時はそのような形でしか事故と向き合うことができず、ラグビー部の指導陣や学校と歩み寄ることができなかったように思います。研究を深めていく中で、私の中にそのようなしなみがある事に気付くことができました。そして、今一度、ラグビー部の指導陣や学校との間に生じてしまった「溝」を修復し、共に歩み寄ることを考えていきたいと思うようになりました。

そして、その実現に向けて行動を起こすことができました。ラグビー部の監督との話し合いが最初の行動となりました。話し合いが始まるまで、緊張した自分を落ち着けることができませんでした。「また事故のことを掘り返して…と思われるのではないか」「お互い何も話せないまま終わってしまうのではないか」、私が考えつく「最悪のシナリオ」が何度も頭をよぎりました。そのような心境の中、話し合いに臨みました。

2010年10月1日、監督との話し合いをおこないました。以前から機会を考えていたものの、お互いに連絡するタイミングを失ってしまい、なかなか実現が叶いませんでした。話し合いは、以前からお話をいただいていた、母校の高校生たちに話す日の調整から始まり、全国大会が終わってからおこなわれる「保護者会」に合わせて、来年1月におこなうことに決まりました。しかし、「その前に、私と指導陣

の方々がどのような目的で、どのような方向性をもって高校生たちに伝えるかを考えたい。そして、そのためには、もう一度『2002年11月17日』に立ち返り、事故に向き合うことが必要ではないか」ということを伝えました。監督もそのことを了解してくれました。その後、事故から現在に至るまでの率直な私の想いを話していきました。監督も「事故直後は、周平のご家族の言うことはなんでもしたかった。それをする以外、何も考えられへんかった。調停の時も、連絡とろうと思っても、結局、叶わなかった」と、当時の心境を話してくださいました。そして「事故と向き合っていく中で、事故を二度と起こさないことを考えていくためには、私からの情報発信だけでは何も変わらないと思うようになりました。それどころか、発信の仕方によっては、本来なら、事故について一緒に考えて欲しかった人たち、私の事故で言えば、あの日グラウンドにいた監督やコーチの方々を遠ざけることになってしまうのではないかと。事故を少しでも減らしていくためには、私だけではなく、監督やコーチの方々の存在が不可欠です。私達が、お互いに事故に向き合って一緒に情報発信していくことができれば、少しでも事故を減らしていくことにつながるんじゃないかと思っています。そのためには、事故当時、お互いが思っていたこと、感じていたことを話したい。私は、あのときこう思っていたけど、先生はどうだったんですかって。今日、私は、監督といろいろと話せましたが、これからコーチの方々とも話し合いたいって思っています。8年も掛かってしまいましたが、今、やっとうこう思えるようになったんですよ。今後も話し合いを継続していきたいという考えを伝えました。最終的に、11月の中旬に自身と監督、コーチの方々を交えて話し合いをおこなうことを決め、話し合いを終了しました。

その後、11月の下旬にコーチの方々を交えての話し合いがおこなわれることとなりました。最初に、ラグビー部の指導陣の方々に会った瞬間、重苦しい雰囲気を感じました。監督とは、調停後も

何度か会う機会がありましたが、今回は、調停後ほとんど話す機会がなかった方々ばかり。調停に至る前の事故の原因をめぐる話し合いの時から会っていない方もいました。始まりの段階で、前回の話し合いとは明らかに違っていたことは確かでした。

2010年11月29日、前回の監督との話し合いの際、お願いしていたコーチの方々を交えての話し合いが実現しました。

開口一番に、監督が切り出しました。「この間の話し合いを受けて、わしらもいろいろと話し合った。どうしたら事故をより減らしていけるか。わしは前回、周平の想いを直接聞いたけど、みんなはまだ詳しいことは聞いてない。まずは、周平からみんなに話したってくれ」。そのあと、私の口からコーチの方々に「事故と向き合っていく中で、事故を二度と起こさないことを考えていくためには、私からの情報発信だけでは何も変わらない」「事故を少しでも減らしていくためには、監督やコーチの方々の存在が不可欠」という想いを伝えました。大きくうなずいてくださるコーチもいたと同時に、目線すらまともにあわない方もいました。以前の私であれば、ここで戸惑ってしまったり、両親に後方支援を求めていたと思います。けれども、事故の原因をめぐる話し合い、調停、この8年の間にできてしまった「わだかまり」「不信感」をそう簡単には払拭できないことは十分に覚悟していたことでしたし、何より、たとえ話し合いがうまくいかなかったとしても、「これは私だけで最後までやり通したい」という強い想いがありました。その想いのもと、そのまま話し合いを続けることができました。

次に、先ほど私の思いを聞いてうなずいてくださったコーチの方から「俺らは調停が起きるまでのことしかわかってない。それ以降、話す機会もなかったし。今、大学院生やったっけ？俺らが知らん今までのことを教えてくれへんか」という話が出ました。それに対して、「学校法人との話し合いで折り

合いがつかず、これからの生活を考えると調停に踏み切る以外方法がなかった」「『司法の場』というものが『事故を二度と繰り返したくない』という自分の想いとはかけ離れていた」「学校法人との調停であったが、実際にそこで話し合われることは、当日の練習のことであり、監督やコーチの方々の名前が出て、やり取りされてしまったことに複雑な思いがあった」と、当時の心境を一つ一つ伝えていきました。その後は、学部時代のことや、卒業や就職のことなどを順々に話していきました。私には、お互いこれまで知らなかった相手の様子を手探りに、少しずつ理解しようとしているように思えました。

ある程度、会話がおこなわれた後、再度監督から「周平の想いは聞いてもらえたと思う。今後、その思いを具体的にどうしていくか」という提案がありました。「俺は事故後、首のトレーニングや密集したプレー、危険なプレーがあったときは選手たちに周平の事故のこと話してきた」といくつかの取り組みを話してくれました。「僕の事故を『教訓』にして練習に取り組んできてくださったことは、私の事故が、ただの『出来事』として終わっていない本当にありがたいこと。今度はそれを外に発信して行ってほしい。『事故が起きた学校』と、全てをマイナスに考えるんじゃなくて、『事故が起きた学校だからこそ』できることをやって行ってほしい。事故から今までの経緯や、今こうやって皆さんと話していることも、事故を未然に防ぐことは難しいかもしれないが、調停や裁判に行くということは止められる何かにつながるかも知れない。私がまず考えていきたいのは、外への情報発信です」という考えを述べました。ここにいる全員に「事故をむし返したいのではなく、お互いに歩み寄っていきたい」ことを伝えたいという思いを乗せて。そのとき、それまで一度も目線が合わなかったコーチの方と目を合わせて話をすることができました。

この日は時間が限られているということもあり、最後に、1月9日の保護者会に合わせて選手、保護者の方に話をさせてもらえることが決まり、話し合

いを終えました。帰りのエレベーターでは、始めのような重苦しい雰囲気を感じることはありませんでした。

歩み寄れたことで、これまででは考えられなかった監督、コーチとの話し合いを実現することができました。そして、11月下旬の話し合いのあと、事故後初めて、監督やコーチとラグビーのことも事故のことでもない「何気ない会話」をすることができました。本当にささいなことかも知れませんが、自分の中で手応えを感じていました。